

## ポジティブな発想で 創る新たな文化

ユニバーサルデザインとは、都市や生活環境、ものづくりを行う際に、障がいの有無、年齢、性別、人種などにかかわらず、できるだけ多くの人が利用しやすいように設計したり、企画したりしようとする考え方をいいます。

健康なときには気にならなくても、ケガをすれば階段は使いにくくなります。日本人にはわかる日本語表示が、日本語を知らない外国人観光客には記号にしかみえないでしょう。大人は問題なく使える流し台も、子どもには水道のレバーまで手が届かないかもしれません。このように日常生活には「誰かにとっての不便」が数多く存在します。ユニバーサルデザインとは、こうしたさまざまな立場や個性、さまざまなシーンを想定した上で「みんなにとっての快適」を追求した、新しい空間やモノ、文化を創造しようとする新しい概念といえます。

ユニバーサルデザインの発想の原点はポジティブ。すべての人を肯定することが前提です。したがって、高齢社会もひとつの特長として肯定し、その上で、一人ひとりが活かされる環境づくりには、どんなデザインが必要かを考えていきます。

## バリアフリーとは何がちがう

### 最初から「バリア」をつくらない

ユニバーサルデザインと混同されやすい考え方として「バリアフリー」があります。

バリアフリーとは、既存のモノや空間に、何か手を加えることによって、「バリア」をなくすという考えです。一方、ユニバーサルデザインは、最初からすべての人にやさしいデザインを考え、どんな人にも平等に、できる限り多くの人に利用可能な環境を提供します。

「誰かにとっての不便」を取り除くバリアフリーの考え方では、特別な設備や対策が必要になるため、コストがかかります。その上、その特別な設備は、当事者にとってありがたいものばかりだとは限りません。

例えば、障がいのある人のために取り付けられた車いす用の階段昇降機について考えてみましょう。確かに、ないよりもあったほうが機能的には便利です。しかし、利用する障がい者にとっては「特別扱い」されたようで、あらたに心理的なバリアができてしまいます。

車いす利用者だけに特別にとりつけた階段昇降機よりも、障がい者だけでなく、妊婦や子ども、大きな荷物を持った人など、誰もが気がねなく利用でき、エレベーター・エスカレーター・階

ユニバーサルデザインについて知ろう

まちででみかける

ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインとは「ユニバーサル＝普遍的」という意味からもわかるように、

誰もが安心して快適に利用できるモノ・空間のデザイン、あるいはこのような考え方のこと。

高齢社会や多文化社会において、一人ひとりがいきいきと

自分らしく生きていくためには、かかせない発想です。

今回は、ユニバーサルデザインの基本的な考え方とともに、

都市空間にスポットをあて、大阪市における、交通機関や施設・公園などにおける

ユニバーサルデザインの事例の一部をご紹介します。



段を平等、公平(同じ所)に設置することで、利用する状況に応じて使うことがユニバーサルデザインと言えます。

## ユニバーサルデザインの7原則

### 最初に使われたのは1974年

「ユニバーサルデザイン」という言葉は、アメリカから入ってきました。この概念を最初に提唱したのは、ノースカロライナ州立大学の教授であったアメリカ人建築家、ロナルド・メイス氏たちです。メイスは、自らも障がいがあり車いすを使っていました。

彼は、1974年に「バリアフリーデザイン報告書」をWHOに提出していますが、ここに初めて「ユニバーサルデザイン」という言葉が使われたといわれています。

ロナルド・メイスは「ユニバーサルデザインの7原則」を以下のように示しました。(図-1)

7原則はあくまでも目安としての考え方で、これを基準として、膨らませていくことが大切です。

## ユニバーサルデザインのキーワード

### 選択肢を増やす、五感をいかす

ユニバーサルデザインを考えるには、いくつかのキーワードがあります。

主なキーワードのひとつとして選択肢を増やすことが挙げられます。利用者が使いやすさを

選べるようにするのがいいです。わかりやすい例でいえば、高低2種類の高さに設置された公衆電話。低い位置の公衆電話という選択肢を増やすだけで、車いす利用者、子どもや背の低い人などにとっても、使いやすくなります。

五感を活かすことも、ユニバーサルデザインにはかせません。視覚に訴える文字や写真や映像から情報が得られない場合、例えば弱視者には、拡大文字、点字、立体文字、音声を使います。また、身体の障がいだけでなく、対人恐怖症でパニックに陥る人もいます。その場合も、人に聞かなくてもわかる情報提供が必要です。こうした五感の機能を統合したのが非常口のサイン。通常は文字だけの表示ですが、緊急事態を知らせる時、フラッシュランプが点滅すると同時に、スピーカーから音声が出ます。したがって聴覚や視覚に障がいのある人にも情報を伝えることができます。

さらに、ユニバーサルデザインが「不便ではない」でなく「快適」というポジティブ思考から生まれたことを考えると、「利用してみたい」と思える、楽しく美しいものであることもキーワードのひとつといえるでしょう。

## 地域でのユニバーサルデザインを考える

### 弱い立場の視点から出発しよう

さて、ユニバーサルデザインが描く誰もが快適に暮らせる環境や社会を実現するために、私たちができることは何でしょうか？

まずは、ユニバーサルデザインの7原則を頭に入れ、自分が住んでいる地域のあらゆる箇所について、地域の人たちと一緒に検証してみるのもひとつの方法です。不便や不都合がたくさん出てきたところで、どんなデザインをすればユニバーサルデザインの発想を生かした地域になるのか、考えてみましょう。出発点は、もっとも弱い立場の人、少数派の人たちからみた地域を考えればいいでしょう。そこに住む人たちから得られる暮らしの実感を伴った意見や「気づき」を集めれば、地域の持ち味を生かした、住民一人ひとりへの思いやりを満ちたデザインができるはずですよ。

2025年には4人に1人が65歳以上という高齢社会を迎えます。また、年齢だけでなく国や文化、性別、障がいの有無など、多様な人々からなる社会を形成していく上で、ユニバーサルデザインのニーズは、ますますニーズを深まることでしょう。ユニバーサルデザインは、多くの人の理解や協力があってこそ成り立つもの。誰もが平等に快適に暮らせる新たな社会の実現に向けて、身近なところから考えてみてはいかがでしょうか。

#### ●参考文献

「ユニバーサルデザインの考え方」監修・梶本久夫、編著者・田中直人ほか、丸善株式会社2002  
しずおかユニバーサルデザイン専門委員「ユニバーサルデザイン入門」ぎょうせい2002  
「ユニバーサルデザインってなに？」監修・東京大学先端科学技術研究センターバリアフリープロジェクト、あかね書房2006

〈図-1〉

## ユニバーサルデザインの7原則

### 1 だれでも公平に利用できる (公平性)



エレベーターや自動ドアは障がい者、高齢者以外にも、小さな子供連れや重い荷物を持った人も快適に利用できる

### 2 柔軟に使用できる (自由度)



高さを変えられるテーブルや椅子などは、一人ひとりの事情に合わせて調節できる自由さがある

### 3 使い方がわかりやすい (単純性)



操作ボタンの数を必要最小限に抑えたりリモコンや携帯電話、家電などは、単純で理解しやすく覚えやすい

### 4 情報がすぐ伝わる (情報理解性)



案内表示に絵文字(ピクトグラム)を使用したり、多言語の看板にしたりすることで、情報が入手しやすい

### 5 誤作動や危険を防止する (安全性)



風呂場で転倒しないために、床を滑りにくくするなど、あらかじめ予測できる危険や誤作動を防ぐ

### 6 少ない力で効率的に使える (省体力)



商品ボタンやお金の投入口などが、腰をかかめなくてもいい位置にあるため、余計な力をつかわなくて済む

### 7 十分な広さがある (空間確保性)



車いすの出入りがスムーズなトイレや人がぶつからずにすれ違える通路など、空間に十分な包容力がある

# こんなにあったやさしい工夫



「だれもが使いやすい設備」

「だれもがわかりやすい表示」



大阪市では、ひとにやさしいまちづくりの一環として、いち早く既存施設のバリアフリー化を進めてきました。近年は、バリアフリーにとどまらず、ユニバーサルデザインの考えを活かした施設・設備が登場しています。今回は、交通機関および建築物の中から「だれもが使いやすい設備」「だれもがわかりやすい表示」の一部をピックアップしました。これらをヒントに、身近な地域で、職場で、家庭で、小さなユニバーサルデザインを実践してみましょう。



●地下鉄の駅施設／1 車いすや大きな荷物があっても、楽に通れる幅広の改札口(最右)。床の方位盤は出口を探す助けに。 2 オレンジカラーに統一され、目に付きやすい今里筋線の地上出入口。 3 車いすなら2台が乗りこめ、救急用寝台の搬送にも使える今里筋線の大型エレベータ。 4 楽な姿勢で操作できる高さの券売機。車いす利用者が足を入れるスペースほか、操作の点字案内や券売機へ誘導する点字ブロックも設置。 5 コンコースに場所情報を集約。ひと目でわかるピクトグラムの案内表示(左)や点字と音声による構内の案内表示(右) 6 ホームからの転落を防止する可動式ホーム柵。混雑時も安全。 7 おむつ交換シートやオストメイト(人工肛門や人口膀胱をつけた人)の方が利用できる温水器付き流しがある多機能トイレ。可動式手すりは車いす利用者の多様な動きに対応。 8 旅客案内表示は、車いす利用者や子どものなどの目線にも配慮し、高い位置へ傾きをつけて設置。

●地下鉄の車内／9 何号車の何番の車両に乗車しているかを示す乗車位置表示。点字でも表示。 10 乗降口そばの車いすスペース。車いすの利用がない場合は、スーツケースなど重い荷物をもつ人なども利用できる。手すりや非常通報装置も設置されている。

## 地下鉄

### 「だれもが安全」を目指す 今里筋線の可動式ホーム柵

大阪市営地下鉄では、バリアフリー、ユニバーサルデザインへの取組みが着実に進められています。エレベータ、エスカレータ、2段手すりなどの設備面をはじめ、路線ごとの色分け、出口の番号化、外国人に配慮した各駅のアルファベットおよび番号表示と「ええまちマップ」の連動、主要駅での4ヶ国語表示など、表示面でも、年々、よりわかりやすく進化しています。

とりわけ2006年に開通した今里筋線には、これまでのバリアフリーの要素が集約され、ユニバーサルデザインの発想を活かした工夫が随所にみられます。

その代表的な設備は、乗客と列車の接触やプラットフォームへの転落を防ぐために、到着時に列車の扉と連動して開閉する可動式ホーム柵の設置。ドア開閉時には、メロディー音で注意を喚起し、ドアに手荷物などが挟まった場合に再開閉する安全装置を設けています。また、プラットフォームと車両の床面の段差を既設路線よりさらに小さくするなど「だれにでも安心して利用できる」よう徹底した安全対策が施されています。

駅舎は、一部を除いて地下1階に駐輪場を設置。地下2階のコンコース、地下3階のホーム階へとスムーズに移動できます。利用者の利便性だけでなく、地下に設置する事により、出入口周辺の不法駐輪を防ぎ、美観を高める役割も果たします。また、バリアフリーからユニバーサルデザインへの移行を示す典型的な例はトイレ。車いすの方も利用しやすい「車いす対応トイレ」が、どなたでも便利でさまざまな機能を付加した「多機能トイレ」へと移行しつつあります。

## バス

### バス乗車の負担を一気に軽減 した好評のノンステップバス。

市バスの代表的なユニバーサルデザインといえば、乗降口の段差をなくしたノンステップバス。身体に大きな負担をかけず乗り降りできるため、高齢者、障がい者、妊婦、子どもをはじめ、多くの人に利用されています。

大阪市では、1996(平成8)年度に初めてノンステップバスを導入し、2004(平成16)年度からは国が定めた標準仕様を採用。2009年5月現在、550輛のノンステップバスが運行中で、全769輛中約7割を占めています。

このうち、2005(平成17)年度以降の購入車から順次、出入口や優先座席、非常口、車いす固定場所の案内表示のほか、室内後部の段差や低い天井、入口扉への手ばさみの注意表示など、視覚的に理解できるピクトグラム(絵文字や絵を使った図表)を多用しています。車いす用スロープ板の有無については、車いすのピクトグラムが車体の外側前後2箇所に表示され、乗車前に確かめることができます。このほか、室内後部の段差を低くするなど、より多くの人を利用

しやすい形へと改良が加えられています。

地下鉄、バスのユニバーサルデザインに共通しているのは「すべての人の安全」に主眼がおかれていること。安全であることへの安心感は、多くの人の社会参加を促し、ユニバーサルな社会につながると考えられます。

## 複合施設

多様な目的の利用者が迷わない動線を配慮した配置と表示。

2007年11月に完成した住吉区役所を中心に、区民センター、図書館などが集約した複合施設をたずね、ユニバーサルデザインを探してみました。ここでは「利用者の動線」を考えたユニバーサルデザインが重視されています。

例えば、メインアプローチから入り、庁舎前広場に出ると、そこから各施設の出入口が視野に入ります。したがって利用者は迷わずに目的地へたどり着けます。施設内のレイアウトもシンプルで、区民センター内にあるホールへは、1階のエントランスからホールの客席へダイレクトにアクセスできます。複雑になりがちな区役所においては、利用の多い住民情報課と保険年金課を市民ロビーに面して設けるなど、見ればすぐにわかる配置になっています。また、多方向から自転車で訪れる利用者を想定し、駐輪場を3方向に配置。外周に設置することにより、敷地内部の広場や隣接する沢之町公園へ自転車の進入を防ぎ、安心してくつろげる場を確保することができます。

住吉区の複合施設には、動線の工夫や設備の多機能性だけでなく、自然光などを積極的に採り入れた誰にでも心地よい場所があり、まさにユニバーサルな空間が実現していました。

取材協力／大阪市計画調整局、大阪市交通局、大阪市都市整備局、大阪市ゆとりとみどり振興局

1 幅広スロープのある複合施設のエントランス。 2 シンプルな表示で迷うことなく駐輪。 3 車いす2台がすれ違う通路。 4 階段には、高さの異なる2本の手すり、その下には階下から見られない不透明のガラス板。 5 各階の案内を1階の案内板に集約。 6 区民センターホール横のギャラリー。広々としたスロープは車いす利用者も安心。 7 車いすでも無理のない姿勢で接近使用できる水飲み場。 8 赤ちゃんシート、乳幼児、オストメイトなどの設備を示すトイレ横のピクトサイン。 9 中に入らなくても、和式・洋式便器の有無や配置がわかる点字付き案内図。 10 車いす利用者と介助者が多様に動ける多目的トイレ。 11 ベルト付きで、オムツ交換などに便利な多目的シート。



1 乗降の負担が少ないノンステップバス。車いすはスロープ板から乗車できる。 2 座席を折りたたみ、車いす固定スペースに。 3 低い位置まで伸び、だれもが手の届く手すり。オレンジ色は、わかりやすいだけでなく、車内の雰囲気を明るくするデザイン。 4 国が定めた高齢者、妊婦、小さな子ども連れ、障がい者の優先座席表示。大阪市は、内部に障がいのある人にも配慮した最右のシールを追加。 5 シンプルで感覚的にわかりやすい表示。これで入口と出口を間違えることはない。



## 「いつでも、どこでも、だれにでも」情報発信の実現を目指す 大阪駅北地区のユビキタス・ネットワーク



ユビキタス・ネットワークとは、あらゆる情報端末、機器、(ICチップを搭載した)物品が、有線/無線の多様なネットワークによって接続され、いつでもどこからでもさまざまなサービスが利用できるようなネットワーク環境、利用環境のことです。

現在、「北梅田(大阪駅北地区)」(2012年度下期、先行開発区域のまちびらき予定)では、ナレッジキャピタル構想に向けて、ユビキタス・

ネットワークの基盤を配し、エリア内であれば、いつでも、どこでも、だれにでも、簡単にネットワークへアクセスし、必要な情報を引き出すことができる、環境づくりが進められています。

この基盤を配備することで、視覚や聴覚に障がいのある人、外国人観光客ほか、初めてこの場所に来る人でも、目的地までスムーズに移動できることや、これに加え、ICタグなどが取り付けられた店舗やイベント情報などの電子装置から発信されるタウン情報も、端末で入手することができるというようなさまざまなサービスの展開が可能となります。